

詩編 128 編

【都に上る歌。】いかに幸いなことか 主を畏れ、主の道に歩む人よ。
あなたの手が労して得たものはすべて あなたの食べ物となる。
あなたはいかに幸いなことか いかに恵まれていることか。
妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。
食卓を囲む子らは、オリーブの若木。
見よ、主を畏れる人はこのように祝福される。
シオンから 主があなたを祝福してくださるように。
命のある限りエルサレムの繁栄を見
多くの子や孫を見るように。イスラエルに平和。

コリントの信徒への手紙一 2章 14節

自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。

「自然の人（プシュキコス）」＝この地上で、ありのままの人。⇔「霊の人（プニューマティコス）」（一コリ 2：15）

妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。
食卓を囲む子らは、オリーブの若木。

この地上で、神から受ける私たちの祝福の形が、このように実現することを、誰しもあるままだに望むだろう。しかし、神の目から見れば、この形が、はかなく過ぎ去り、そこはかたない寂しさと隣り合わせであることは明らか。

コリントの信徒への手紙二 5章 11節

主に対する畏れを知っているわたしたちは、人々の説得に努めます。わたしたちは、神にはありのままに知られています。わたしは、あなたがたの良心にもありのままに知られたいと思います。

ヨハネの手紙一 3章 2節

愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。

詩編 27 編 4 節

ひとつのことを主に願い、それだけを求めよう。命のある限り、
主の家に宿り 主を仰ぎ望んで喜びを得 その宮で朝を迎えることを。

エフェソの信徒への手紙 1 章 23 節

教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

シオンから 主があなたを祝福してくださるように。

命のある限りエルサレムの繁栄を見

多くの子や孫を見るように。イスラエルに平和。

シオンの祝福、エルサレムの繁栄、イスラエルの平和は、私たちが見たことも、心に思い浮かぶこともなかったこと（一コリ 2：9）であり、墮落前のエデンの園に勝る。

シオン、エルサレム、イスラエルに至っては、もはや墮落することは不可能。

「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創世記 2：7）

こうして生きる者となった自然の人（プシュキコス）より勝る者とされたので。

いかに幸いなことか 主を畏れ、主の道に歩む人よ。

コリントの信徒への手紙一 1 章 22-25 節

ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

十字架を宣べ伝えるとは、神を畏れ、主の道に歩むことが、幸いであることを体現すること。「妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。食卓を囲む子らは、オリーブの若木」という御言葉に、私たちはそこはかたく惹かれていくが、そんなありのままの私たちを、聖書の御言葉全体（＝主イエス）が導いて下さる。

幸いな人 = 主を畏れ、主の道に歩む人。

ローマの信徒への手紙 8 章 22-25 節

被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。